

第3回「文学のまち大津」推進協議会 会議録（要旨）

1 開催日時 令和8年10月9日（金） 10:00～12:00

2 開催場所 大津市役所 別館2階 321会議室

3 出席者 委員 7名

（只友委員、加藤委員、七里委員、福井委員、

金子委員、角間委員、福永委員（今村委員代理））

事務局 7名

（川島市民部長、木元市民部次長、文化振興課：井上課長、栗山副参事、

小阪田主任、山本学芸員、井口学芸員）

計画策定支援業務受託業者 3名

傍聴 なし

4 内 容

1) 開会

2) 座長挨拶

3) 議事

（1）「文学のまち大津」ブランディング戦略（素案）

【「文学のまち大津」ブランディング戦略（素案）について事務局から説明】

（2）「文学のまち大津」今年度の主な取組 進捗状況

【「文学のまち大津」今年度の主な取組 進捗状況について事務局から説明】

【質疑】

○委員 戦略では、市民による文学文化活動が整理されているが、事業者による取組も含めて、もう少し幅広く捉えてはどうか。例えば、京阪電車では文学作品に関連した企画が実施されている。商業的な取組であっても、文学と結び付けることで新たな展開が期待できるため、事業者との連携という視点を戦略に取り入れることが重要ではないか。また、戦略の6年間の推進イメージは、種まきから活動の発展・自走化へと進むだけでなく、そこで生まれた活動が次の種まきにつながる循環的な仕組みとして示すとよい。

○委員 今年度は様々な取組が具体化している。特に「湖都の葉マルシェ」が盛況だったと聞いており、成果を詳しく伺いたい。

○事務局 「湖都の葉マルシェ」は、クリエイターの出店枠を100から150ブースに増やし、飲食やワークショップ、図書館の本の譲渡会などを含め約200ブースとなった。本を通じた来場者と出店者の交流や、参加者が文章をつないで物語をつくる機会などを提供することができた。

○委員 本のイベントでは作り手と読み手の直接の交流が魅力になる。若い世代を中心に広がるZINEなどの自費出版についても、制作や販売を支援する拠点・機会を大津に設けるなど、若者や子ども対象の事業もよいのではないか。長く続く「湖都の文学」も、こうした取組と結び付けて発信できるのではないか。また、湖都の葉マルシェの継続・発展に当たっては天候への対応も考える必要がある。

○事務局 今回のマルシェでも詩や日記、絵など多様なZINEが販売されていた。市民活動センターの印刷設備や他地域の自主出版支援の事例も参考にし、制作環境や情報発信を検討したい。「湖都の文学」についても、一人で冊子を作るのが困難な方にとって、作品を持ち寄って一冊の冊子を作ることができるとともに、一人ひとりの作品を残す意義を大切にしていきたい。

○委員 長年の文学活動を継承しながら、現代の若者や子供にも訴求する新たな創作活動を育てていくことも重要である。また、文化振興課だけでなく、教育委員会など庁内の関係部局が連携する仕組みが必要である。推進体制には、行政内部の連携と、市民・事業者が自主的につながる場という二つのプラットフォームが必要ではないか。市民が単に文学を鑑賞するだけでなく、自ら創作し、発表し、互いに刺激を受ける仕組みを整えることが重要である。また、効率や成果が重視される時代だからこそ、文学を通じて立ち止まり、自ら考え、主体的に行動する力を育むという価値も大切にしたい。

○委員 文学にはゆっくり考え、異なる視点から物事を捉える力がある。そうした価値も大切にしていける必要がある。

○委員 文学への参加のハードルを下げることが重要である。「青春21文字のメッセージ」も、言葉を作るだけでなく、見て感じることを大切にしてきた。今回のマルシェでは学生らと協力して言葉と絵を組み合わせたワークショップを実施

し、文章を書くことが苦手な子どもや大人も楽しんでいた。自分の作品を見てもらえる喜びも大きい。

○委員 文学を高尚なものと捉えるのではなく、絵や音楽など他の芸術分野とも結び付けながら、誰もが気軽に親しめるようにすることが重要である。また、文学資源を保存・継承することも重要であり、それらを生かして新たな創作活動につなげていくという視点も大切ではないか。

○委員 「湖都の葉マルシェ」は本の販売、創作体験、交流など多様な楽しみ方ができる。市内に限らず全国や海外から人が集まるイベントへ育ててはどうか。コンテンツを分かりやすく整理し、年間を通じてウェブ上でも交流や活動が続くようにできるとよい。

○委員 約5,500人が来場したことは大きな成果であり、開催日の定着や広報の工夫などによってさらに発展する可能性がある。

○委員 屋外開催に加えて屋内での開催や、年に複数回の実施も検討できるのではないか。

○委員 来場者・出店者の市内外の割合を把握しているのか。自費出版のイベントには遠方からも書き手や読者が訪れる。京都からのアクセスの良さも含め、大津の立地を積極的に発信するとよい。

○事務局 出店者は大津市内が約45%、県内の他市町が約20%、県外が約35%で、年齢層も20代から60代を中心に幅広い。来場者の居住地等についてはアンケートを集計中である。

○委員 当初は「文学」という言葉が参加の壁になる懸念もあったが、多くの来場者が集まったことから、本や文学への潜在的な関心を感じる。この関心を継続的な活動につなげたい。

○委員 個人の集まりや小規模なサークルで本を楽しむ人々が出会い、出版社や作家とも交流できるような機会を増やすことが重要である。そのためのプラットフォームの設計が鍵となる。

○委員 文学をまちづくりに生かしていくための取組が、戦略の中で具体的に示されてきたことや第4次文化振興計画においても議論されていることは評価できる。一方で、文学は絵画や音楽、演劇など他の芸術分野とも深く関わっており、そうした広がりを戦略の中でも示してはどうか。また、文学資源については、古

典だけでなく、花登筐をはじめとする大津ゆかりの近現代の作家にも目を向け、幅広く掘り起こしていくことが重要ではないか。

○委員 文学を文化振興の象徴的な取組として位置付け、他の芸術分野との連携を図りながら、学校教育やまちづくりなど幅広い分野への波及につなげていくことが重要である。

○委員 資料の文学資源リストには、俳句を含め多くの資源が掲載されている。作品の内容や場所との関係を分かりやすく紹介し、市民が訪ねたり学んだりできる資料として活用してほしい。

○委員 文学資源リストを地図や関連情報と結び付け、ウェブで閲覧できるようにすれば、文学散歩のルートや新しい企画を市民自身が考えられる。

○委員 句碑などは現地で文字を読み取ることが難しい場合もある。作品の読みや背景が分かる案内があると、現地を訪れる楽しみが増す。

○委員 文学資源の情報を提供するだけでなく、それを活用して市民が新たな活動を企画・実施できるよう、文化振興課をはじめ、観光やまちづくりなどの関係部局が連携して支援することが重要である。

○委員 文学資源リストは市外の作家やクリエイターにとっても、小説、映画、漫画などの創作の題材になり得る。活用しやすい形で公開してほしい。また、文学資源を題材にZINEを制作したり、子どもたちが自由研究として地域の文学を調べて冊子にまとめたりする取組も考えられる。

○委員 文学資源リストは今後も調査・収集を続け、活用を意識しながら蓄積することが大切である。

○委員 文学資源の調査や情報の整理、データベースの継続的な更新などは、行政が責任を持って取り組むべき基盤整備である。その上で、蓄積した情報を広く公開し、市民や事業者による新たな創作活動や企画につなげていくことが重要である。

○事務局 文学資源リストは学芸員が調査・整理したものであり、大津に多くの文学資源があることを改めて認識した。まずは代表的な資源からホームページで分かりやすく紹介し、段階的に内容を充実させていきたい。今後も学芸員などの専門人材と連携しながら、継続的な情報の整理・発信に取り組んでいきたい。

○委員 学芸員による継続的な調査・蓄積は重要であり、その基盤が市民の新しい活動

や国際交流にもつながる。

- 委員 近年、坂本城など歴史的な資源への関心が高まっているが、こうした話題を文学とも結び付けながら、市民の関心を広げていくことが重要ではないか。また、大津ゆかりの脚本家である花登筐についても、一時代を築いた人物として、戦略の大津ゆかりの作家として位置付けてほしい。
- 委員 多くの文学者が大津を訪れ、作品を生み出した理由を、琵琶湖や京都との距離、風土などから掘り下げると、大津ならではの魅力を伝えられるのではないか。
- 委員 大津ではこれまでも様々な文学に関する取組が行われており、新しい事業を増やすだけでなく、既存の取組を整理し、内容を深めていくことが重要ではないか。また、市外の人にも関心を持ってもらえるよう、ウェブ上で情報を分かりやすく発信するとともに、さらに興味を持った人が実際に大津を訪れ、文学を楽しめるような仕組みをつくるのが大切だと思う。
- 委員 今後制作される「文学のまち大津」のPR動画に期待している。また、来年に実施される「文学時間」についても、文学に親しむ機会を集中的に設ける取組として評価できる。屋外イベントだけでなく、図書館などの屋内施設も活用しながら、これまでに出了された様々なアイデアを取り入れ、充実した取組にしてほしい。
- 委員 「なぜ大津で文学が育まれてきたのか」といったテーマについて、市民が意見を出し合える場を設けてはどうか。そのような機会も含め、誰もが気軽にアクセスし、「文学のまち大津」の取組に参加できるプラットフォームを整備することが重要ではないか。
- 委員 大津の文学や歴史の価値を、市民自身が発見し、理解を深めていくことが重要である。そのためにも、大学等の専門的な知見を生かしながら、市民や関係団体など多様な主体が連携し、活動できる仕組みを整えていくことが大切ではないか。

4) 報告事項

(1) ユネスコ創造都市ネットワークについて

【ユネスコ創造都市ネットワークについて事務局から説明】

5) 閉会